

# 西ドイツの音楽事情

稲 垣 静 一

## 市民に直結する音楽文化

ドイツの冬は長く厳しい。黒雲は重く頭上を覆い、陽光に浴することは極めてまれである。しかし市民は、クリスマスからイースターに向けて最も活気づき解放感にひたる。そのころ、音楽シーズンたけなわである。

各地に繰り広げられる多彩なコンサートは、その都市の規模と地域性によって異なり、都市ごとに個性ある音楽文化を形成しているから興味深い。

バイエルン州の首都ミュンヘンは、モーツァルト、ワーグナー、R・シュトラウスのオペラの伝統を脈々と今日に伝えている。ここにはバイエルン国立歌劇場をはじめ、ヨッフム、クーベリック等の名指揮者のもとで世界的名声を得たバイエルン放響、マーラーほか大曲初演の歴史的業績を誇るミュンヘン・フィルなどが集中し、一大音楽都市をなしている。かと言って、バイエルン州の他の小都市が音楽的に劣性であるとは一概に言えない。バンベルク交響楽団やバイロイトのワーグナー祭の存在がよい例である。

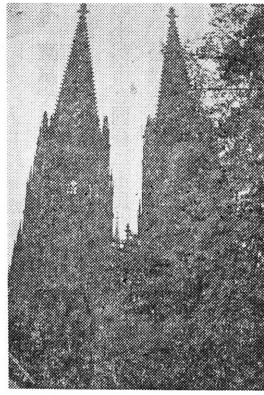
他の州では、北はハンブルク、西はケルン、南西ではシュトゥットガルト、特別地区西ベルリンを含めて、それぞれ重要な音楽文化

## 圏である。

ここには中央とローカルという概念はない。いわば州の各都市すべてローカルなのである。ドイツ民族の多数小国家の分立から、国家統一という歴史的背景に由来する連邦制は、政治、文化の中央集権化の弊害を減少させている。この分離主義は州、都市と市民生活を緊密にし、各都市の音楽文化に顕著に反映している。

京都市の姉妹都市ケルンは、ノルトライン・ヴェストファーレン州最大の都市であり、百万に近い人口を擁している。当然、放送局や諸外国の文化センターが連立し、マスの文化様相を呈している。列車でライン河の橋を渡ると高く聳え立つケルン大聖堂の双塔が眼前に迫まる。列車は静かにケルン駅構内に流れ込む。ケルン駅はヨーロッパ有数の交通の要衝である。南はミュンヘンからウィーン、さらにローマへ。カールスルーエからバーゼルを経てジュネーブへ。西はアーヘンを経てブラッセルへ、さらに西南に取ればパリに通ずる。北上すればハンブルク、西北はアムステルダムへ。東はベルリンを経てモスクワに通ずる。国際列車がしきりに行き交い、多国人種の往来するケルン駅である。筆者は国立

ケルン音楽大学での研究のため、しばらくケルン駅の近くに逗留した。ケルン音楽大学では拙作の音楽作品について分析、解説をしたが、参加した学生の半数以上が諸外国の留学生で占められていた。



ケルン大聖堂

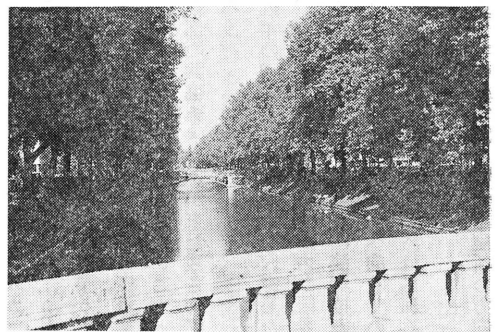
近年、外国人の西ドイツ流入傾向は顕著に現われている。特に音楽分野で言えば、ケルン放送管弦楽団員の募集オーディションの応募者の大半が東ヨーロッパ人とアジア人で占められている。応募者の演奏技術水準も本国のドイツ人に優るとも劣らない。外国人が西ドイツで学び、卒業後も西ドイツに残って演奏活動が続けることを望む者が多い背景には、充実した音楽教育機関と質的に高い教育内容や権威ある名立たる教授スタッフが留学生をひきつけていると思われる。終局目的は優秀な成績をおさめて、己の目指すオーケス

トラやオペラ・ハウスでの定職に就きたいという願望がある。自国に帰っても必ずしも音楽活動が保証されるとは限らず、音楽家の道の峻しさは日本だけではない。

この点、音楽文化が日常生活に浸透している西ドイツでは、音楽活動の場が多く、音楽家は社会的に優遇されるという社会風習が、外国人音楽家の西ドイツ流入を増大させている。因みに、西ドイツのオーケストラの数は七十二、六十以上の音楽会ホール。各主要都市には必ずオペラ・ハウスがある。これらすべて国、州、あるいは市の助成によって成り立っている。従って入場料は非常に廉価である。日本の重立ったオーケストラは十余、オペラ・ハウスは皆無である。

音楽環境の違いは、国土面積、人口密度からも比較にならないが、根本的な相違は市民の音楽文化に対する意識の差にある。日本やアメリカに見られるように音楽芸術が商業主義の過当競争の渦中に曝されている状況とは全く対照的なのである。

連邦制による分離主義がもたらす個性ある独自の音楽文化都市形成は、他の小都市にも窺い知ることができる。ケルンの北に州の首都デュッセルドルフがある。デュッセルドル



デュッセルドルフ＝ケーニヒスアレー

フ駅正面玄関には、日本商社の寄贈と思われる孟宗竹の植込みが、いとも奇妙な光景を醸していた。ここは日本領事館や日本人学校があり、確かに日本商社も多く、日本人が最も集中し、ヨーロッパ進出の一大商業基地である。ハイネを生み、ロマン主義音楽のシューマン、メンデルスゾーンが活躍したデュッセルドルフは、今やファッションの町として知られているが、フランス風のマロニエ並木の美しいケーニヒスアレーは昔ながらの優雅さをとどめている。デュッセルドルフ・オペ

ラ・ハウスと市立劇場を拠点に展開される音楽活動は、フアッシュンの町に似つかわしく、華麗さの中にも品位がある。

ケルンの南には西ドイツ連邦共和国の首都ボンが近接している。デュッセルドルフとボンのいずれもケルンからの距離は、アウドバインないし列車で三十分以内である。ボンはベートーベン生誕の地であり、今もベートーベン生家を訪れる人が絶えない。またボンは大学都市として栄えた古き趣きを残しながらも、共和国の首都に定められてからは、各政党本部が置かれ、諸外国の通信社も多い。しかし、その人口は僅かに三十万足らずである。東京やパリのように極端な中央集中は見られない。静かな<sup>たやす</sup>佇<sup>たす</sup>を見せるボンは、他の小都市と同様に市民のオペラ・ハウスがあり、公立のオーケストラがある。その地域に密着した独自の音楽文化は、他の大都市に吸収されることがない。

ボンのベートーベン・ハレ・オーケストラと、ケルン放響とに技術的優劣があるにしても、ボン市民は演奏技術の良し悪しのみに執着することはない。むしろ伝統や歴史的文化遗产に対する市民の誇りと、その風土に育まれる独自の文化志向が先行している。それに

は「土地を耕す」という西ヨーロッパ文化の語源的意味が市民の文化意識にあるのではなからうか。つまり、文化は人間の手が加わっていない自然と対置される。文化は与えられるものではなく、市民自ら築き上げるという意識である。住民の自由の表現としての地方自治の根強い伝統は、今なお、各都市個々の音楽文化に息づいている。

### 名門オーケストラの変貌

～西ドイツを中心に～

オーケストラは、都市文化のシンボリックな存在である。かつてベルリン・フィルが、ニキシュ、フルトヴェングラーといった歴史的な大指揮者とともに全盛時代を画したのは、戦前、ドイツ帝国の首都としての威信の反映にはかならない。

敗戦によるベルリン分割。陸の孤島とまで言われた西ベルリンは、政治力学が生んだ壁の虚しさを今日にさらしながらも、世界の注目を集める国際的文化芸術都市に成長した。その歴史は、ベルリン・フィルそのものでもある。

若杉弘指揮のベルリン・フィルで武満徹の『ピアノとオーケストラのための』『リバーランド』『ドイツ初演を感慨深く聴いた。オケの性

格はドイツ的と言うより、むしろ国際化した体質を備えている。楽器の機能や演奏法にも合理性を生かしている。絶えず進歩を求める姿勢は、常任指揮者カラヤンの完全主義と相まって、極度に磨き抜かれた響きと並はずれた演奏の高みをもたらしている。協演したP・ゼルキン<sup>ゼルキン</sup>は現代性を鋭い感覚でとらえ、音楽がもつ今日の意味を辛らつに提示していた。

一方、ミュンヘン・フィルは、一昨 autumn に近代的な大ホールを完成して話題となった。P・シュナイダー<sup>シュナイダー</sup>指揮、レオンスカヤのピアノによるベートーベンの『ピアノ協奏曲一番』は、南ドイツ的な解放感が漂う生彩がある。しかしホール共鳴の偏りが気にかかった。オケがホールになじまないことと、ホール細部の共鳴チェックが未だ残されているのだろう。

近年の、より多くの聴衆を収容したい願望は、オケの音量と音像バランスの限界に駆り立てる。演奏ホールとともに演奏技術の改善も必至である。二十一世紀へ向けてのミュンヘン・フィルの音づくりが注目される場所である。

オケの表現領域の拡大と刷新の方向は、各

放送局所属の放送管弦楽団の活動に見いだせる。特に興味を持ったのは、ケルン放送管弦

楽団の奏者各自の音楽的自己主張の強さである。指揮者と楽員のコンセンサスが得られなければ、各自、思い思いの楽想を發展しかねない。指揮者は縦の線よりも、各奏者の横の線の流れに専念する。全体主義における個の確立という点で、最も現代的なオケである。

国营放送の任務から、未知の重要作品や新作の紹介、普及に重点が置かれる。放送管弦楽団はいつも新曲に取り組まなければならない。楽員の話によると、古典的名曲をやることは極めて少ないという。オール・ベルク作品のプロも珍しくない。

H・シュタインが振ったマルタンの七つの管楽器、ティンパニー、打楽器と弦楽オーケストラのための協奏曲の幾重にも織りなす錯綜した楽句においても、強い説得力を持って迫ってくる。そこにはヨーロッパ音楽の伝統に安住しがちなオケの体質から脱皮して、現代に対応できる活力がある。

前向きな文化行政もさることながら、聴衆を魅了し、満足感を与えずにはおかぬ奏者の気魄が伝わってくる。その芸術家気質がオケの表現領域の拡大と新たな局面の打開に関

わっていることは確かなようである。

～西ドイツ周辺～

西ドイツに隣接する諸国には、特記すべき音楽文化を誇る都市がある。しかもドイツ語圏内にあって、歴史上、深い関わりを持ち、今日なお、顕著な音楽交流が認められる諸都市の存在である。その筆頭に挙げられるのは先ずウィーンである。マリア・テレジア女帝時代に豪華絢爛な古典音楽文化を築いたウィーンは、今なお、頑に古き伝統を堅持し、その栄華を今日に伝えている。カールス教会広



ウィーン国立歌劇場

場を中心にマリア・テレジアン・イエローの華麗な建物が連立し、ウィーン国立歌劇場（元 宮廷歌劇場）の壮大な容姿やシュテファン寺院など、いたるところにハプスブルク家代々のよすがが偲ばれる。特にマリア・テレジア女帝の庇護のもとに活躍したハイドゥン、モーツァルト、ベートーベン等の大作曲家たちの石像が町角や公園に鎮座していて、通行人はたやすく楽聖に謁見することができ

る。本来、古典主義の理念は調性の秩序にあったが、その調性を崩壊させ、敢然と無調音楽を打ち出し、二十世紀音楽の夜明けを現出させた作曲家たち、アーノルト・シェーンベルク、アルバン・ベルク、アントン・ウェーベルンを輩出したのもウィーンである。創造のパラドックスは何と皮肉なことである。

ウィーンのオーケストラはウィーン交響楽団とウィーン・フィルである。共にウィーン国立歌劇場の伴奏とウィーン・コンツェルトハウスの演奏会を兼務している。ウィーン・フィルは歌劇『ルチア』で聴くことができ、主役グルペロワの絶妙な歌唱力をひき立てていたウィーン・フィルの格調の高さは、オーケストラそのものが歌劇とともに発展し

てきた長い歴史の重みを眼の当りに見る想いであつた。ウィーン交響楽団はアダム・フィッシャーの指揮、ラドウ・ルブーのピアノでブラームスのピアノ協奏曲一番を聴く機会を得たが、その迫熱的、かつ大胆さは驚きであつた。新旧両側面を覗かせた二つのオーケストラは、ウィーンという音楽聖地にあつて、燦然とヨーロッパに君臨している。

南ドイツに隣接する音楽都市に、規模は小さいがスイスのチューリッヒがある。チューリッヒ湖に面したチューリッヒ・トーン・ハレでは、ホルスト・シュタイン指揮のフランクの交響曲ニ短調にめぐり会つた。ヨーロッパで最も目ざましい活躍を続けるシュタインは、ここでも強靱な推進力で聴衆を沸かせていた。多少、荒削りな響きにはローカル・カラーが否めないが、旅情を慰めて余りある。

西ドイツ北方には、オランダの名門オーケストラ、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団がある。オランダと言えば、レンブラントやゴッホが思い浮び、風車のある田園風景に憧れを抱かせる。東京駅のモデルになつたアムステルダム駅は秀麗な姿で迎えてくれる。世界屈指のコンセルト・ヘボウをW・ザヴァリッシュ指揮でシュペルトの交

響曲十番を聴いたが、流麗で、その無何有の郷の響きは現代性を超越したユートピア的世界である。

これらの著名なオーケストラは、その都市固有の文化的土壌に根差し、古き伝統を固守する点では保守的とも言えるが、また、それはオーケストラが現代に生き残るすべなのかも知れない。クラシック音楽の砦であるオーケストラは、今なお無尽の威光を放っている。

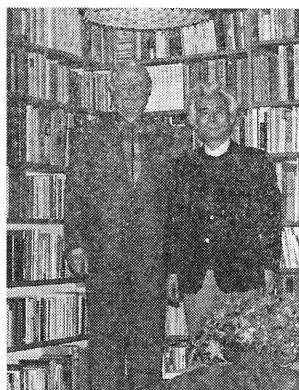
### 多元化する作曲界

現代音楽の低調が叫ばれて久しい。一時期のような斬新な前衛音楽は陰を潜めてしまつたのは確かである。

かつて前衛音楽の旗手であつたK・シュトックハウゼンは、作曲技法の新機軸を次々と発表して絶えず先導を切つた。その先鋭な作曲理論を巡つて世界の作曲界は目まぐるしく揺れ動いた。また現代音楽の新進情報発信の拠点として活躍したダルムシュタット夏期ゼミナーは、今では国際現代音楽研究所としての機能を兼ね、老大な楽譜を蔵し、国際的視野で現代音楽の系統的な研究を進めている。シュトックハウゼンはケルンの郊外で十年計画という壮大な構想で超大作「licht」

(光)に取り組んでいる。

筆者は調査研究のためダルムシュタット国際現代音楽研究所に通つた。その道すがら、京都ドイツ文化センター所長を永年勤めたクリストフ・ケンプ博士宅を訪ねた。ケンプ博士とは彼の所長在任中に、シュトックハウゼンとの討論会や日独現代音楽交流の種々な演奏会を共に企画した想い出があつたからである。現代音楽の振興に深い理解を持つケンプ博士は、ライプツヒヒ大学から京都大学に移って教鞭を取り、また日独文化研究所及び京都ゲーテ・インスティテュート設立に多大な功績を残し、親日家としても名高い。退職後はハイデルベルクを流れるネッカー河上流の広大な高地で悠々自適の生活を送つていた。ケンプ博士と筆者は久々の再会を欲び合い、かつての日独現代音楽交流を回顧したのであ



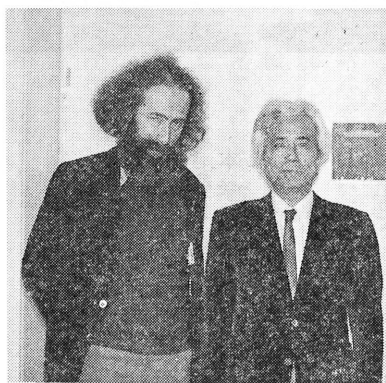
Dr. ケンプと筆者

る。

既に先取的な技法を追って競った時代は過ぎたのだろうか。今、表現の内容と質的な問題が問われているのかも知れない。現代音楽が歩んできた過去への反芻の時代とも言える。

現に、その兆しは西ドイツに起った新ロマン主義である。W・リームは調性の復帰を標榜し、現代音楽が忌避してきたメロディックな流動性を敢然と打ち出した。事実、豊饒な筆致と表情豊かなリームの音楽は、広い聴衆層に受け入れられている。この潮流は若い作曲家にも波及した。U・シュトラッス、W・シュバイニッツなどの抒情的、ないし心象的表現にも新ロマン主義に一脉通ずるものがある。

また、従来の現代音楽の複雑さ難解さによる聴衆との隔離。その反省と批判はアメリカに起った。S・ライヒの単純性の音楽は、まさに、そのアンチテーゼであった。この単純主義を独自に発展させたW・ツンマーマンは、単純性に禅の思想を付与して新境地を開いた。ツンマーマンは今まで忘れられていた古い民俗的な舞曲を掘り起し、その素朴さと単純性を音楽の根源的生として甦えらせてい



ドイツ放送局のエールシュレーゲルと筆者

る。

現在、西ドイツで最も旺盛な評論活動を続けているドイツ放送局のR・エールシュレーゲルとの談合は、貴重な教示を筆者に与えたが、なかでも西ドイツの新鋭作曲家、W・ツンマーマンを異口同意に賞賛していたのが印象的であった。

いつの時代も時世の寵児的作曲家の出現は否めないが、独創的な表現領域を開拓している作曲家たちも無視することはできない。思索的な音楽を書くD・シュネーベル、瞑想に沈思するハーメル、独特な音響源の開発によって未知の世界を開示するヘスボス、聴覚イメージのフォルムによるラッヘンマン、シア

ター・ピースのカーゲルなど錚々たる作曲家たちの存在である。今や一人の作曲家が一世を風靡することは難しい。主義主張や作品傾向は多岐にわたり多元的状态を深めつつある。現代の価値感や嗜好の多様化を反映しているのと取れるが、むしろ創造本来の姿を取りもどし群雄割拠している。

逞しい創造力は西ドイツ音楽文化の活性剤なのである。ヨーロッパの偉大な音楽遺産の継承は創造活動の進展にあるとする論理は、国、州、都市の文化施策にも浸透している。

また物質文化を越えて、ある理念を目ざして創造される芸術や思想、あるいは宗教などの精神活動を核とした普遍的文化志向が市民の文化意識に根強い。その精神活動が今日、西ドイツの音楽文化を根底から支えている。(本稿は京都新聞連載記事を加筆したものである)

(いながき せいいち 文学部助教授)

